ら抜き言葉と日本語教育

（『言語の研究』８号
2021年５月）

浅川　哲也

はじめに

ら抜き言葉は、「見れる・来れる・食べれる」などに代表される言い方であり、日本のマスメディアによってしばしば採りあげられ、広く知られている日本語の「誤用」のひとつである。

「平成27年度　国語に関する世論調査」[(1)]によると、ら抜き言葉の使用実態は次のとおりである。（ア）が正用の文、（イ）がら抜き言葉を含む文であり、それぞれの文末丸括弧内は「使う」と回答した被調査者の割合である（「どちらも使う」・「わからない」という回答の割合は除いた）。

（ア）今年は初日の出が見られた（44.6％）　（イ）今年は初日の出が見れた（48.4％）
（ア）早く出られる？（44.3％）　（イ）早く出れる？（45.1％）
（ア）朝５時に来られますか（45.4％）　（イ）朝５時に来れますか（44.1％）

「見る・出る・来る」を可能表現にするとき、「見る・出る」では、助動詞「られる」を接続させる正用よりも、「見れる・出れる」というら抜き言葉の使用者の方が優勢であり、また、「来れる」は正用に対してほぼ拮抗している。日本語母語話者におけるら抜き言葉の浸透は深刻なものである。

日本語を学習する日本語非母語話者（以下、日本語学習者）が、自国内の日本語教育機関で規範的な日本語を学習した後に日本国内に留学すると、日本国内の日本語母語話者が日常的に頻用するら抜き言葉に遭遇して、これに当惑したという経験談は、よく耳にするところである。

本稿では、日本語教育の観点から、日本語母語話者のら抜き言葉をどのように捉えるべきか、また、ら抜き言葉とどのように向き合うべきか、という点について、主に日本語母語話者と現代日本語の側にある問題点を挙げて検討することを目的とする。

１．「誤用」とは何か

日本語教育学の第二言語習得論では、「誤用」は次のように説明されている。第二言語習得の目標言語の母語話者の言語運用が「正用」であり、母語話者の「正用」に一致しない第二言語学習者の言語運用が「誤用」である（市川 2005）。従って、日本語教育学では、この定義において「日本語母語話者の誤用」という説自体が成り立たない。

この点について、浅川（2017）では、ある言語の母語話者の言語運用を「母語話者であるから」という根拠のみによって、無批判に「正用」とすることに問題はないのかという指摘をした。母語話者にもさまざまな位相があり、また、同一の言語の内部においても、地域・年代・職種などによってさまざまな変種がある。特に、ある時期において、母語話者の言語運用が激しく動揺している場合に、日本語教育はいかなる「日本語」をもって第二言語習得の目標言語としての「日本語」としているのであろうか。

かつて、現代日本語の共通語は、一定の教育を受けた階層の間で使用される東京語の話し言葉を基盤とするものとされていた[(2)]。浅川（2011）では、現代日本語において、教育を受けた階層が使用する東京語を基盤として成立した規範的な全国共通語をひとつの基準とし、そこから逸脱した言語運用を狭義の「誤用」と定義している。なお、ここでいう「誤用」とは、規範的な共通語からの逸脱的な言語運用のことであって、日本語の方言使用のことを指すものではない。

２．ら抜き言葉とは何か

ら抜き言葉とその周辺の問題について確認をしておく。受身・可能・自発・尊敬の意味を表わす助動詞「れる・られる」を動詞の未然形に接続させて、可能（または不可能）の意味を表わす方法は、日本語における可能表現形式のひとつである（以下、これを助動詞型とする）。助動詞に「れる」と「られる」の二つの語形があるのは、「れる」と「られる」とで接続する動詞の活用の種類を分担しているからである。五段活用動詞以外の「見る・食べる・来る」などを助動詞型の可能表現形式にするとき、「見られる・食べられる・来られる」と言うのが東京語本来の規範的な言い方である。

しかし、「見る・食べる・来る」をあたかも可能動詞であるかのように、「見れる・食べれる・来れる」のようにら抜き言葉で言うとき、東京語を基盤とする共通語としては、ら抜き言葉は「誤用」であるといえる（浅川・竹部 2014）。

ら抜き言葉とは、上一段活用動詞・下一段活用動詞・カ行変格活用動詞の未然形に自発・受身・可能・尊敬の助動詞を接続させるときに、「られる」ではなく、「れる」を接続させる言い方である。動詞の未然形とは、打消の助動詞「ない・ぬ／ん」を接続させたときの語形のことである。未然形の最後の音節がア段音か非ア段音かによって、「れる・られる」のどちらが接続されるかが決定されるのが本来の日本語文法である。

次に示すように、五段活用動詞の未然形語尾はア段音なので、「れる」が接続する。上一段活用動詞・下一段活用動詞・カ行変格活用動詞の未然形語尾は非ア段音なので「られる」が接続するのである。

行　く：行<u>か</u>＋（ない）・・・・行<u>か</u>＋れる
見　る：見（み）<u>見</u>＋（ない）・・・・・見（み）　＋られる
食べる：食<u>べ</u>＋（ない）・・・・食べ＋られる

来　る：来（こ）＋（ない）・・・・・来（こ）　＋られる

つまり、助動詞「られる」とは、五段活用動詞（四段活用動詞）以外の動詞の非ア段音の未然形に助動詞「れる」が接続するときに、動詞の未然形が五段活用動詞（四段活用動詞）のようにア段音になるように「ら」を介したものである。規範的な日本語では、助動詞「れる・られる」が接続するときに、動詞の未然形の語尾（助動詞の語頭を含む）が形式上ア段音で統一されることを優先しているのである。

３．ら抜き言葉がなぜ「誤用」なのか

現代日本語の全国共通語の規範文法の観点からは、ら抜き言葉は明確に日本語母語話者の「誤用」ということができる。また、「見れる・出れる・来れる」などのら抜き言葉が一定の年代層において相当に定着したとみられる現在においても、なお、ら抜き言葉を「誤用」とする理由としては次の３つが挙げられる。

３－１．動詞の語幹部分の拍数が３拍以上の動詞でのら抜き言葉を許容できるか

ら抜き言葉は、上一段活用動詞・下一段活用動詞・カ行変格活用動詞の語幹の拍数が１拍・２拍の使用頻度の高い語から生じたとされる（中村 1953）。また、ら抜き言葉と動詞語幹の拍数との関係性を指摘する説は多い。前述のように、「見れる・出れる・来れる」などの動詞語幹の拍数の少ないら抜き言葉は、現在では正用の使用を上回ってしまった感がある。しかし、「平成27年度　国語に関する世論調査」によると、「食べる」（動詞語幹２拍）・「考える」（動詞語幹４拍）の正用とら抜き言葉の使用比率は次のとおりである。語幹が２拍以上の動詞の場合、ら抜き言葉にすることに抵抗を感ずる日本語母語話者が比較的多いことがわかる。

（ア）こんなにたくさんは食べられない（60.8％）（イ）こんなにたくさんは食べれない（32.0％）
（ア）彼が来るなんて考えられない（88.6％）　（イ）彼が来るなんて考えれない（7.8％）

この他に、「見れる・出れる・来れる」を日常的に使用している年代層であっても、動詞語幹の拍数が３拍以上の動詞のら抜き言葉には、日本語母語話者、日本語学習者ともに違和感を感ずるという調査報告もある（王 2013）。

語幹１拍：「見（み）・着（き）・出（で）・寝（ね）・来（こ）」……「見れる・着れる・出れる・寝れる・来れる」
語幹２拍：「起き・借り・食べ・受け」…「起きれる・借りれる・食べれる・受けれる」
語幹３拍：「信じ・始め・集め・覚え」…「信じれる・始めれる・集めれる・覚えれる」
語幹４拍：「考え・訴え・温め」……「考えれる・訴えれる・温めれる」
語幹５拍：「話しかけ・陥（おとしい）れ」……「話しかけれる・陥れれる」

動詞の語幹が１拍・２拍のら抜き言葉「見れる・来れる・食べれる」と、動詞語幹が３拍以上のら抜き言葉「信じれる・考えれる・話しかけれる」などとでは、ら抜き言葉であるということにおいて本質的な違いはない。

もし、動詞語幹が１拍・２拍のら抜き言葉の「見れる・来れる・食べれる」を許容するとしたら、動詞語幹が３拍以上のら抜き言葉の「信じれる・考えれる・話しかけれる」も許容しなければならないということになる。しかし、「信じれる・考えれる・話しかけれる」の使用に多少とも違和感を感ずるのであれば、そもそも、動詞語幹が１拍の段階から、ら抜き言葉の使用は避けるべきなのである。

３－２．ら抜き言葉からとめどなく拡大していく形態変化を許容できるか

五段活用動詞から派生した可能動詞に、さらに「れる」が接続するいわゆる「れ足す言葉」は、2000年代の初めからすでに事典類にその記述がみられる[(3)]。また、浅川（2016）では、現代日本語において、ら抜き言葉の「れる」が接辞化し、「れる」が文節末に連続して接続する過剰な表現（「れれる言葉」）が生じていることを指摘した。接辞「れる」の過剰な連接という文法上の形態的な変化はとめどなく進行しているのである。

接辞化した「れる」が可能動詞やら抜き言葉に接続するのと同様に、動詞本体に可能の意味をもつ「できる」に「れる」が接続する例も現実に発生している。また、サ行変格活用動詞（複合語サ行変格活用動詞を含む）に新たなら抜き言葉「せれる」が発生している。ら抜き言葉を擁護する諸説は、これらの日本語運用を日本語母語話者の「正用」として認めるのであろうか。用例（１）はれ足す言葉、用例（２）はれれる言葉、用例（３）は「できれる」、用例（４）はサ行変格活用動詞のら抜き言葉「せれる」、用例（５）は「せれる」のれれる言葉である。

（１）ＡＤＨＤの事もっと詳しく書けれるように調べてます
（自然治療法医の子育て　思わずにっこり！パラダイス日記、2010.3.28、
http://henmama.blog84.fc2.com/blog-entry-322.html）

（２）米沢駅から車で10分程度行ったところにあります。米沢牛が食べれれるとの事で訪問しました。
（食べログ：米沢牛が食べれれる焼き肉屋さん、2013.3.20、
http://tabelog.com/yamagata/A0602/A060201/6000216/dtlrvwlst/5047078/）

（３）12月の試験日には立ち会いが出来れるようになりたいものだ・・・
（Travel：ゆっくり人生、2008.8.24、
http://ara1617.blog36.fc2.com/blog-date-200808.html）

（４）証拠不十分ですぐに釈放せれることになる
（セルジオソウタの夢見る映画鑑賞、2010.8.7、
http://kinnguso284.blog61.fc2.com/blog-date-201008.html）

（５）私も死刑に相当する犯罪人が死刑に処せれれる事には異論ありません。
（中国で日本人を処刑するそうですが、2010.4.3、
https://okwave.jp/qa/q5797649.html?by=datetime&order=DESC）

３－３．ら抜き言葉に発生している「受身・尊敬」の意味用法を許容できるか

ら抜き言葉を「日本語の合理的な変化」として擁護したり、積極的に評価したりするこれまでの日本語研究者の見解の多くは、以下の２点に集約される（浅川 2016）。

- 可能動詞を派生させられるのは五段活用動詞だけであったが、上一段活用動詞・下一段活用動詞・カ行変格活用動詞に「可能動詞」の派生が拡大したのがら抜き言葉だから、ら抜き言葉は“日本語の合理的な変化”である。
- 「自発・受身・可能・尊敬」の四つの意味を表わす助動詞の「れる・られる」に対して、可能動詞とら抜き言葉は「可能」の意味だけに特化しており、助動詞「れる・られる」は「受身・尊敬」の意味だけで用いるので、ら抜き言葉は“日本語の合理的な変化”である。

しかし、可能動詞・ら抜き言葉・れれる言葉には「受身・尊敬」の用法が発生しているので、ら抜き言葉を支持するこれらの諸説の根拠は、現実に生じている現在の日本語の変化の実態に対しては、もはや通用しないのである（浅川 2016）。用例（６）は受身用法のら抜き言葉、用例（７）は受身用法のれ足す言葉、用例（８）は尊敬用法のら抜き言葉である。

（６）農林水産関係３，医療関係１の合計38機関が，それぞれ定めれた区分に従って輸出検査を行っている。
（OW1X_00340・通商白書・通商産業省大蔵省印刷局・1978）

（７）若いあんちゃんに久しぶりに絡めれました。
（OY11_09080・Yahoo!ブログ・2008）

（８）太田議員から、厳しい財政状況にも拘わらず使いみちに疑問があると切々と訴えれました。
（佐賀県議会議員内川修治の県政日記、2008.11.17、
http://uchikawa516.blog123.fc2.com/blog-date-20081117.html）

ここまで述べてきたことをまとめると、拍数の多い語幹の動詞のら抜き言葉に違和感がある、れ足す言葉「行けれる」などに違和感がある、〈れれる言葉〉の「食べれれる」などに違和感がある、サ行変格活用動詞のら抜き言葉「せれる」に違和感がある、ら抜き言葉の「自発・受身・尊敬」の用法に違和感がある、という点のひとつでも日本語母語話者に当てはまるのであれば、ら抜き言葉は、その使用を避けるべきであるし、少なくとも、ら抜き言葉を、書き言葉や、改まった場面での話し言葉で使用することを避けるべきであると考える。

ところで、改まった様式での書き言葉や、改まった場面での話し言葉で、言語主体にら抜き言

葉の使用回避の意識が働くとすれば､それは敬語表現の機能と近似したものということができる。日常の会話でら抜き言葉を使用している日本語母語話者が、待遇度を高くしなければならない場面において、ら抜き言葉ではなく正用を使用するとなれば、ら抜き言葉と正用は、常体と敬体の対立関係に対応するものと考えられる。

４．現代日本語の可能表現形式の様相

可能動詞・ら抜き言葉・れれる言葉などが発生した原因としては、日本語における可能表現形式の動詞と助動詞の関係の問題が考えられる。現代日本語における助動詞型・動詞型可能表現形式の形態的な分類は、次のとおりである（浅川 2016)。

ａ，規範的な助動詞型：〔自発・受身・可能・尊敬の意味用法〕
　ａ１，五段活用動詞・サ行変格活用動詞の未然形（語尾がア段音）＋助動詞「れる」
　　例）行かれる、立たれる、読まれる、取られる、される
　ａ２，上一段・下一段（下一段型活用の助動詞「(さ）せる」を含む。以下同)・カ行変格活用動詞・サ行変格活用動詞の未然形（語尾が非ア段音）＋助動詞「られる」
　　例）見られる、食べられる、来られる、せられる、させられる
ｂ，五段活用動詞の下一段化動詞：〔可能動詞〕
　　例）行ける、書ける、読める
ｃ，上一段・下一段・カ行変格活用動詞の未然形（語尾が非ア段音）＋助動詞「れる」：〔ら抜き言葉〕
　　例）見れる、食べれる、来れる、別れれる、付けれる
ｄ，可能動詞＋れる：〔れ足す言葉〕
　　例）行けれる、書けれる、読めれる、思えれる
ｅ，（ａ・ｃ・ｄ）＋れる：〔れれる言葉〕
　　例）思われれる、取られれる、うたわれれる、されれる

ａ～ｅは、古代日本語からの通時論的な変化の過程を現代日本語において共時論的に表したものとみることができる。これを活用の種類ごとに通時論的に図示すれば、次のとおりである。

〈カ行四段（五段）活用動詞〉

行かる → 行かるる → 行かれる → 行かれる　〔助動詞型〕
　　→ 行ける → 行ける → 行ける　〔可能動詞〕
　　→ 行けれる → 行けれる　〔れ足す言葉〕
　　→ 行けれれる〔れれる言葉〕

〈上一段活用動詞〉

見らる → 見らるる → 見られる → 見られる → 見られる〔助動詞型〕
　　→ 見れる → 見れる　〔ら抜き言葉〕
　　→ 見れれる〔れれる言葉〕

〈下二段（下一段）活用動詞〉

食べらる → 食べらるる → 食べられる → 食べられる → 食べられる〔助動詞型〕
　　→ 食べれる → 食べれる　〔ら抜き言葉〕
　　→ 食べれれる〔れれる言葉〕

〈カ行変格活用動詞〉

来らる → 来らるる → 来られる → 来られる → 来られる〔助動詞型〕
　　→ 来れる → 来れる　〔ら抜き言葉〕
　　→ 来れれる〔れれる言葉〕

この図によれば、共時論的にみて現代日本語では、助動詞型、可能動詞、ら抜き言葉、れ足す言葉、れれる言葉の語形が並立的に共存しているということになる。日本語学習者が日本語母語話者と接触して日本語を自然習得する機会があるとき、日本語学習者が混乱する可能性があるのは、現代日本語においては、ある意味についての表現形式が、正用・誤用取り混ぜて共時論的に複数存在しているからなのである。

前述したように、規範文法においても、五段活用動詞のみが可能動詞（下一段活用動詞）を派生させられるということになっている。従って、五段活用動詞に限っては、助動詞「れる」を接続させる助動詞型と、五段活用動詞が下一段活用動詞に変換した可能動詞とが正用として併存している。

現代東京語においては、助動詞型は自発・受身・尊敬の意味を表わす場合が多く、助動詞型が可能の意味で使用されるのは東京語以外の方言に多くみられ、可能動詞が可能専用の表現形式であれば、東京語の五段活用動詞においては、助動詞型（自発・受身・尊敬）と可能動詞（可能）とで意味用法の棲み分けが成り立っていた。しかし、可能動詞・ら抜き言葉・れ足す言葉・れれる言葉が可能の意味のみならず、受身や尊敬の意味をも表わす現在のような段階に入ると、助動詞型と可能動詞の意味用法上の相違はなくなり、助動詞「れる・られる」に本来ある「自発・受身・可能・尊敬」の意味に回帰していくのである（浅川 2016）。

５．動詞の語幹の語尾と活用の種類の関係

五段活用動詞の多くが、下一段型に活用する可能動詞を作ることができるので、可能動詞と、本来ある下一段活用動詞との間で混乱が生じやすい。また、五段活用動詞には終止形の中にイ段音を含む語があり、この場合は本来の上一段活用動詞との混同が生ずる原因となりうる。以下、具体例を挙げて検討してみたい。

５－１．五段活用動詞の終止形語尾/-eru/

五段活用動詞の終止形の語尾が/-eru/となる動詞は、下一段活用動詞との混乱が生じる可能性が高いと考えられる。

五段活用動詞「かえる（帰る）」と、下一段活用動詞「かえる（変える）」とを比較してみると次のとおりである。用例の語頭の○は規範文法からみて適切な語形、×は不適切な語形、？は筆者（1964年長野県生まれ）の内省によると疑義のある語形であることを表わす（以下、同じ）。「帰る」と「変える」の助動詞型と可能動詞・ら抜き言葉とを音韻だけで判断するには、両語間の東京式アクセントの型の相違を知ることが必要であり、また、意味上の判別は文脈に大きく依存することになると思われる。

かえる（帰る・五段活用動詞）
　○かえられる〔助動詞型〕……受身・尊敬の意味（方言では可能の意も）
　○かえれる　〔可能動詞〕……可能の意味
かえる（変える・下一段活用動詞）
　○かえられる〔助動詞型〕……受身・可能・尊敬の意味
　×かえれる　〔ら抜き言葉〕……可能の意味

五段活用動詞「並ぶ」は、理論的には可能動詞「並べる」を作ることができるはずであるが、五段活用動詞の自動詞「並ぶ」には、もともと対となる他動詞の下一段活用動詞「並べる」があるので、可能動詞「並べる」を作ると、他動詞「並べる」と語形上で同形衝突が起きる。筆者の内省では、可能動詞の「並べる」は筆者の使用語彙になく、可能の意味としては「並ぶことができる/並ばれる」を用いる。しかし、インターネット上で検索してみると、用例（９）のように可能動詞「並べる」の使用例があるのである。

同様の例として、五段活用動詞の自動詞「近づく」と、その対になる他動詞の下一段活用動詞「近づける」がある。筆者の内省では、「近づける」は可能動詞ではなく、他動詞としての使用語彙しかないのであるが、用例（10）のように「近づける」を可能動詞として使用する日本語母語話者がいるようである。

並ぶ（五段活用動詞・自動詞）

○並ばれる〔助動詞型〕……受身・尊敬の意味（方言では可能の意も）

？並べる　〔可能動詞〕……可能の意味

○並べる（下一段活用動詞）……「意志をもって整列させる」の意味（他動詞）

○並べられる〔助動詞型〕……受身・可能・尊敬の意味

近づく（五段活用動詞・自動詞）

○近づかれる〔助動詞型〕……受身・尊敬の意味（方言では可能の意も）

？近づける　〔可能動詞〕……可能の意味

○近づける（下一段活用動詞）……「意志をもって接近させる」の意味（他動詞）

○近づけられる〔助動詞型〕……受身・可能・尊敬の意味

（9）１時間待ちの行列に並べる？「苦にならない」という回答には男女差も人気店では連日行列ができるもの。待ち時間を気にせず並べる人はどれくらいいるのだろう。

（秋山はじめ・ニュースサイトしらべえ、2019.9.1、https://sirabee.com）

（10）ロバート「老いた体で返すよりも、若々しい体で返した方が天に近づけるだろう…（立ち上がってビルから町並みを見下ろす）返せるだけ返せば天に近づけるはずだ…（クククと笑い）」

（キルライフ 過去ログ③、2012.12.8、https://w.atwiki.jp/chaosdrama/pages/2870.html）

「しゃべる」は五段活用動詞であるから、可能動詞「しゃべれる」を作ることができる。しかし、「しゃべる」の助動詞型の「しゃべられる」も語形として存在し、「しゃべられる」と「しゃべれる」とが併存しているのである。

可能動詞の「しゃべれる」を、下一段活用動詞としてのその語形から、ら抜き言葉であるかのように認識してしまうと、ら抜き言葉を回避しようとして過剰修正の意識がはたらき、「しゃべれる」に「ら」を入れたら入れ言葉の「しゃべられる」が生ずることになる（浅川 2018, 2019）。これは語形としては助動詞型の「しゃべられる」と同一なのであるが、発生した心理的な原因がら抜き言葉の回避にある場合、「しゃべられる」は「しゃべる」の助動詞型ではなく、「しゃべる」のら入れ言葉ということになろう。用例（11）は「しゃべられる」の使用例であるが、方言的な助動詞型としての使用なのか、過剰修正としてのら入れ言葉なのかは判断が難しい。

しゃべる（五段活用動詞）

○しゃべられる〔助動詞型〕……受身・尊敬の意味（方言では可能の意も）

○しゃべれる〔可能動詞〕……可能の意味

？しゃべられる〔ら入れ言葉〕……可能の意味

(11) 私は田舎出身なので、昔は方言をしゃべっていた。大学入学と同時に標準語をしゃべる環境におかれたが、そう簡単にしゃべられるようになれなかったことを思い出す。どうしてもイントネーションが関西弁になってしまう。…そう考えると、同じ日本語でさえ難しいのに、英語をそう簡単にしゃべられるようになるはずがないと思う。
(アメリカ生活・夫のアメリカ転勤が決まってからの記録、2005.12.8、
http://americalife.seesaa.net/article/10404959.html)

現代日本語の動詞における自動詞・他動詞の関係は極めて複雑な様相を呈しているが、五段活用動詞と下一段活用動詞との対応に限定して整理すれば、以下のとおりである(浅川・竹部2012)。

動詞には、語幹の一部は同じだが、その活用形(活用語尾の形)によって自動詞・他動詞に変わるものがあり、これには次例のように、(a)自動詞・他動詞ともに五段活用動詞であるもの、(b)自動詞が五段活用動詞で他動詞が下一段活用動詞であるもの、(c)自動詞が下一段活用動詞で他動詞が五段活用動詞であるもの、の三種がある。

(a)帰る(自五段)―帰す(他五段)
　　残る(自五段)―残す(他五段)
(b)変わる(自五段)―変える(他下一段)
　　育　つ(自五段)―育てる(他下一段)
　　並　ぶ(自五段)―並べる(他下一段)
(c)裂ける(自下一段)―裂く(他五段)
　　流れる(自下一段)―流す(他五段)
　　折れる(自下一段)―折る(他五段)
　　倒れる(自下一段)―倒す(他五段)
　　明ける(自下一段)―明かす(他五段)
　　こぼれる(自下一段)―こぼす(他五段)

自動詞・他動詞の対応関係が、(b)五段活用動詞と下一段活用動詞、または、(c)下一段活用動詞と五段活用動詞との対応になっている組み合わせの場合、五段活用動詞から下一段活用動詞の可能動詞が派生するとき、五段活用動詞の対となる元からある下一段活用動詞との間に意味用法上のさまざまな混乱が生じやすいものと考えられる。

5－2. 五段活用動詞の終止形語尾/-iru/

五段活用動詞の終止形の語尾が/-iru/となる動詞は、上一段活用動詞との混乱が生じる可能性が高いと考えられる。

五段活用動詞「きる(切る)」と、上一段活用動詞「きる(着る)」とを比較してみると次のと

おりである。「切る」と「着る」の弁別には、両語間の東京式アクセントの型での相違を知ることが必要であり、また、意味上の判別は文脈に大きく依存することになると思われる。

「知る」は、五段活用動詞が他動詞であり、下一段活用動詞の「知れる」が自動詞である。「知れる」は『万葉集』（８世紀）に用例が見られる古い語で、「知る」に対して受身形・使役形となって「他人の知るところとなる。知らせる」の意を表わす。「～かも知れない」という連語にあるのは下一段活用動詞の「知れる」である。しかし、五段活用動詞「知る」に可能動詞を派生させると「知れる」となり、これは元からある下一段活用動詞と同形となってしまう。用例（12）は「人に知られる」という下一段活用動詞の「知れる」本来の用法であるが、用例（13）は明らかに「知ることができる」の意味の可能動詞として使用されている。

「炒る」はその語形が上一段活用動詞と類似しているが、五段活用動詞なので可能動詞「炒れる」を作ることができる。用例（14）は一見するとら抜き言葉のようにみえるが正用である。「炒る」の場合は、「炒られる」は助動詞型で正用だが、「炒れられる」とすると過剰修正のら入れ言葉になってしまう。

きる（切る・五段活用動詞）
　○きられる〔助動詞型〕……受身・尊敬の意味（方言では可能の意も）
　○きれる　〔可能動詞〕……可能の意味
きる（着る・上一段活用動詞）
　○きられる〔助動詞型〕……可能の意味
　×きれる　〔ら抜き言葉〕……可能の意味

知る（五段活用動詞・他動詞）
　○知られる〔助動詞型〕……受身・尊敬の意味（方言では可能の意も）
　？知れる　〔可能動詞〕……可能の意味
　○知れる（下一段活用動詞）……「自然にわかる、人に知られる」の意味（自動詞）
　×知れられる〔助動詞型〕……受身・可能・尊敬の意味

炒る（五段活用動詞）
　○炒られる〔助動詞型〕……受身・尊敬の意味（方言では可能の意も）
　○炒れる　〔可能動詞〕……可能の意味
　？炒れられる〔ら入れ言葉〕……受身・可能・尊敬の意味

（12）金融系ではなくても、サラ金から借りていると職場に知れると要注意ですよね（職場に知れる＝返済がやばいという図式も大きく影響はしていると思いますが）。
（OKWAVE・借金について、2013.4.20、
https://okwave.jp/qa/q8051252.html?by=datetime&order=DESC）

(13) じゃあ生命の「意思」を進化させれば現在の人類が過去を知れるように未来を知れるってことか！
(idea note・時間はどこで生まれるのか、2008.12.20.
http://stratovector.blog112.fc2.com/blog-date-200812.html)

(14) まずお砂糖をいれて野菜から水分をだし、その水分とお醤油・酒・みりんなどで炒り煮します。でも、中に火が通る前に水分がなくなり焦がしていたのです。今は里芋・ニンジンは前もってレンジでチンするのでそのようなことはなくなりました。里芋の角がとれるぐらいまでちゃんと炒れるようになりました～♪
(東京生まれ神奈川育ちの、大阪在住～しょっちゅう京都・炒り鶏、2005.9.29、
https://ameblo.jp/cba19850/entry-10004701847.html)

５－３．可能動詞を派生させられない五段活用動詞

現代語のラ行五段活用動詞「ある」は、古典語ではラ行変格活用動詞「あり」であった。終止形・連体形の合一という言語変化の現象により連体形「ある」が終止形「あり」に取って代わり、中世以降にラ行四段活用動詞に同化した動詞である。現代語の五段活用動詞「ある」の助動詞型「あられる」は文語的な尊敬用法として使用されるが、可能動詞「あれる」は規範的な文法としては成り立たないと考えられる。しかし、インターネット上の用例では可能動詞の「あれる」が発生している。

現代語のラ行五段活用動詞「蹴る」は、古典語ではカ行下一段活用動詞「蹴る」であった。しかし、「蹴る」は江戸時代中期以降に四段活用化し、現代語の五段活用動詞に至る。命令形に五段型の「蹴れ」と下一段型の「蹴ろ」とが併存しているほか、可能動詞「蹴れる」はやや不安定な感じがあるとされる[(4)]。

ある（五段活用動詞）
　○あられる〔助動詞型〕……尊敬の意味
　×あれる　〔可能動詞〕……可能の意味

蹴る（五段活用動詞）
　○蹴られる〔助動詞型〕……受身・尊敬の意味（方言では可能の意も）
　？蹴れる　〔可能動詞〕……可能の意味

(15) 見た目の老化と、頭の柔軟さは、比例するように思いますね。／中身が美しくアルと、見た目も綺麗でいれるのは、本当だと思います。／いつもポジティブであれる、つまり、健康であれるからです。
(老化を防止し、若返る!!　年代不明、
http://kandk4.blog76.fc2.com/blog-category-0.html)

(16) 僕は無条件に人や物を好きになる人でありたいと思っている。･･･ 大事なのは／僕が好きであれるかどうか、もしくは嫌いになることができないであれるか、にかかっている。
（ケンイチ一人旅中継、2013.9.5、
http://kenken-tabix.seesaa.net/archives/201309-1.html）

(17) サッカーは両足蹴れるのがベストだが、右足に比べて左足はどこか神秘的だ。
（佐藤俊『中村俊輔リスタート』文藝春秋、2002年）

6．『日本語教育のための基本語彙調査』のデータによる検討

現代日本語においては、五段活用動詞とその派生形である可能動詞（下一段活用動詞）と、下一段活用動詞・上一段活用動詞と助動詞「れる・られる」の接続した語形との混乱が発生している。この現象が、日本語教育にどのような影響を与えることになるか、日本語教育に関するひとつのまとまった語彙表によって検討したい。

国立国語研究所がインターネット上で公開している「『日本語教育のための基本語彙調査』データ」は、「日本語教育のための基本的な語彙に関する調査研究」であり、「留学生等外国人の日本語学習者が、専門領域の研究または職業訓練に入る基礎として、はじめに学習すべき日本語の一般的・基本的な語彙」選定のために妥当な標準を得ることを目的とした調査研究」であるという。(5)

このデータ中にある「日本語教育語彙表」は、17920語の語彙が五十音順に６段階の学習段階別（初級前半・初級後半・中級前半・中級後半・上級前半・上級後半）に分類されている。このうち、動詞は、動詞１類（五段活用動詞）、動詞２類（上一段活用動詞、下一段活用動詞）、動詞３類（サ行変格活用動詞、カ行変格活用動詞、副詞）に分類されている。

動詞３類の中にある副詞122語が含まれているがこれは除き、「日本語教育語彙表」中にある動詞2153語を整理したものが【表１】である。(6)

【表１　「日本語教育語彙表」による動詞一覧表】

	動詞１類	動詞２類	動詞３類	計
初級前半	23	8	2	33
初級後半	58	31	0	89
中級前半	166	82	9	257
中級後半	406	202	66	674
上級前半	525	277	85	887
上級後半	134	44	35	213
計	1312	644	197	2153

「基本語彙」データ中にある2153語の動詞を、次の例に示すように類別の終止形の語尾（最後から２拍目の母音と最後の１拍の母音または子音と母音）の音韻別に分類し、語数順に整理したものが【表２～４】である。

動詞１類　会う（アウ）　：/au/
動詞１類　遊ぶ（アソブ）　：/-obu/
動詞１類　帰る（カエル）　：/-eru/
動詞１類　切る（キル）　：/-iru/
動詞２類　開ける（アケル）：/-eru/
動詞２類　着る（キル）　：/-iru/
動詞３類　来る（クル）　：/-uru/
動詞３類　する（スル）　：/-uru/

【表２】中で、終止形の語尾が/-eru/となるもの、/-iru/となるものを網掛けで示した。

１類動詞（五段活用動詞）であって、終止形の語尾が/-eru/となる18語の内訳は以下のとおりである（φは用例なしの意）。下線は筆者の内省では可能動詞にしがたい語、二重下線は下一段活用動詞にすると元の五段活用動詞の意味が変換されるとみられる語である。

（初級前半）帰る
（初級後半）φ
（中級前半）返る、ける、しゃべる、減る、
（中級後半）生き返る、湿る、滑る、照る、振り返る、持ち帰る
（上級前半）焦る、生い茂る、茂る、練る、よみがえる
（上級後半）つんのめる、翻る

可能動詞にしがたい動詞には、「蹴る」など本来は五段活用動詞ではなかった語のほかに、「返る・減る・よみがえる」など自動詞的性質の強い語、「湿る・生い茂る・茂る・翻る」など自然現象に関わる語、「焦る・つんのめる」など動作主体の意図せざる動作を表わす語などが含まれる。

例えば、「茂る」を「茂れる」としたとき、それは古典語の完了の助動詞「り」が「茂る」に接続した連語「茂れり」の連体形とみるべきであり、口語訳すれば「茂っている/茂った」という意である。しかし、古典語の教養がない日本語母語話者は、「茂れる」を「茂る」の可能動詞として「茂ることができる」の意味で認識するであろう。

１類動詞（五段活用動詞）であって、終止形の語尾が/-iru/となるのは48語である。その内訳を学習段階別に示すと以下のとおりである。下線は筆者の内省では可能動詞にしがたい語、二重下線は下一段活用動詞にすると動詞の意味が変換すると考えられる語である。

【表２　動詞１類の語尾別語数】

	初級前半	初級後半	中級前半	中級後半	上級前半	上級後半	計
aru	3	12	36	74	81	12	218
asu	1	3	14	68	92	18	196
au	3	6	18	33	37	10	107
oru		6	16	31	32	11	96
omu	2		3	24	54	8	91
uku	1	1	8	22	24	9	65
osu		2	11	20	28	4	65
uru	1	3	6	11	27	11	59
iru	2	3	3	12	22	6	48
aku	1	5	11	13	11	6	47
amu			3	10	16	7	36
ou		1	6	13	11	3	34
umu	2	1	6	6	11	5	31
esu		2	2	10	11	1	26
atsu	1	1	4	4	12	2	24
usu			5	8	6	2	21
eru	1		4	6	5	2	18
iku	2	2	1	6	4	1	16
oku		2	1	6	5	2	16
obu	1	2	4	2	4		13
imu		2	1	5	2	2	12
ugu		1		2	9		12
agu				3	6	2	11
uu		1		3	4	2	10
eku				1	5	3	9
ogu	1		1	1	4	2	9
abu		1	1	3	1		6
egu				2		1	3
emu				1	1	1	3
otsu		1		2			3
utsu			1	1			2
ebu				2			2
iu	1						1
itsu						1	1
ubu				1			1
計	23	58	166	406	525	134	1312

【表３　動詞２類の語尾別語数】

	初級前半	初級後半	中級前半	中級後半	上級前半	上級後半	計
eru	4	24	78	189	254	35	584
iru	4	7	4	13	23	9	60
計	8	31	82	202	277	44	644

【表4　動詞３類の語尾別語数】

	初級前半	初級後半	中級前半	中級後半	上級前半	上級後半	計
uru	2	0	9	66	85	35	197
計	2		9	66	85	35	197

（初級前半）切る、知る
（初級後半）要る、はいる、走る
（中級前半）入る、握る、参る
（中級後半）言い切る、裏切る、限る、貸し切る、区切る、締め切る、立ち入る、散る、値切る、張り切る、交じる、横切る
（上級前半）弄る、打ち切る、押し切る、恐れ入る、陥る、思い切る、思い知る、聞き入る、遮る、仕切る、断ち切る、ちぎる、突っ走る、飛び散る、取り仕切る、乗り切る、びびる、踏み切る、振り切る、見切る、焼き切る、割り切る
（上級後半）いびる、入り交じる、炒る、澄み切る、罵る、よぎる

状態性の意味を表わす動詞や、動詞の無意志的な用法の場合などは可能動詞になりにくいとされている。五段活用動詞の可能動詞化（下一段活用動詞化）は、五段活用動詞のすべてに及ぶものではなく限定的なものと考えるべきである。従って、五段活用動詞のすべてを機械的に可能動詞化することはできない。

おわりに

本稿では、日本語教育とら抜き言葉の関係について、主に、日本語母語話者の側にある問題点を中心に検討した。

現代日本語では、五段活用動詞・下一段活用動詞・上一段活用動詞と助動詞「れる・られる」との接続関係や、自動詞・他動詞の対応関係において、日本語母語話者の間でも誤用と正用とが入り交じる、混沌とした言語運用の実態が生じている。従って、ら抜き言葉と日本語教育との問題において、日本語教育は次の三つの問いに向き合わなければならないものと考えられる。

ら抜き言葉への正しい理解なしに日本語教育ができるのか。

母語話者の「誤用」問題への理解なしに日本語教育ができるのか。

いままさに動揺している日本語の文法を日本語学習者にどのように教えるのか。

【注】

（1）「平成27年度『国語に関する世論調査』の結果の概要」（文化庁文化部国語課、平成28年２月調査、調査対象：全国16歳以上の男女）
https://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/kokugo_yoronchosa/pdf/h27_chosa_kekka.pdf

（2）国語調査委員会（1916）による。

（3）安藤（2004）による。

（4）『明鏡国語辞典　第三版』（2021年１月、北原保雄編、大修館書店）による。

（5）当該データの出典元は『日本語教育のための基本語彙調査（国立国語研究所報告78）』（1984

年・昭和59年刊）。https://mmsrv.ninjal.ac.jp/bvjsl84/

（６）「日本語教育語彙表」の元のデータでは、「上級前半・動詞１類」は524語、「上級前半・動詞２類」は278語である。しかし、「上級前半・動詞２類」のデータ中に「消し去る」があった。「消し去る」は明らかに五段活用動詞（動詞１類）なので、本稿では、これを「上級前半・動詞１類」に移動し、「上級前半・動詞１類」を525語、「上級前半・動詞２類」を277語に修正した。

【参考文献】

浅川哲也（2011）『知らなかった！日本語の歴史』東京書籍

浅川哲也（2016）「ら抜き言葉と〈れれる言葉〉と可能動詞にみられる自発・受身・尊敬の用法について―振れれるのもいやだし・いじめれれる子供・女性にことわれ続け―」（『言語の研究』第２号）

浅川哲也（2017）「ら抜き言葉と〈れれる言葉〉の拡大―日本語母語話者の〈誤用〉問題―」（『文学・語学』第221号）

浅川哲也（2018）「〈ら入れ言葉〉の使用実態とら抜き言葉との関係について―永遠に見れられる・名前で呼ばられる・さらっと食べられる―」（『言語の研究』第４号）

浅川哲也（2019）「国会会議録にみられる〈ら入れ言葉〉の使用実態について」（『言語の研究』第５号）

浅川哲也・竹部歩美（2014）『歴史的変化から理解する現代日本語文法』おうふう

安藤千鶴子（2004）「レ足す言葉」（林巨樹・池上秋彦・安藤千鶴子編『日本語文法がわかる事典』東京堂出版）

市川保子（2005）「誤用研究」（『新版日本語教育事典』大修館書店）

井上史雄（1998）『日本語ウォッチング』岩波書店

王　怡韡（2013）「中国人日本語学習者における『ら抜き言葉』の使用に関する研究」（『日本語研究』第33号）

岡崎和夫（1980）「『見レル』『食ベレル』型の可能表現について―現代東京の中学生・高校生について行った一つの調査から―」（『言語生活』第340号）

国語調査委員会（1916）「例言」（『口語法　全』文部省）

申　鉉竣（2001）「近代語における可能動詞の動向」（『国語と国文学』78-2）

中村通夫（1953）「『来れる』『見れる』『食べれる』などという言い方についての覚え書」（『金田一博士古稀記念言語民俗論叢』三省堂出版）

【付記】
本稿は2019年度科学研究費助成事業・学術研究助成基金助成金（基盤研究（C））による研究課題「日本語の先端的な動向と日本語母語話者の誤用問題に関する通時的研究」（課題番号19K00647）の研究成果の一部である。

（あさかわ・てつや　東京都立大学）